

中級学習者を対象とした聴解授業

— 「聴解演習C」授業報告 —

A Class Report of “Listening Comprehension C” for Intermediate Japanese Learners

石井由美

要旨：

本稿は、岐阜大学留学生センター日本語研修コースにおける中級学習者を対象とする聴解授業「聴解演習C」についての報告である。2007年度後期から2014年度後期まで担当した中で、主に2014年度前期・後期に行った授業内容や指導方法を報告し、今後に向けての課題をまとめる。

1. はじめに

2007年度後期に「聴解演習C」を担当することになって以来、試行錯誤の連続の中で少しずつ改善を加えながら担当を続けてきた。聴解の授業に何が期待されているか、その期待に答えるにはどのような授業内容が適切か、日本語力の差があるクラスにおいて授業の進め方にどんな工夫が必要か、教室外での学習を促すための宿題や小テストの頻度や難易度はどの程度が適当か、などを常に念頭に置いてきた。初回授業に行うアンケート結果やコース途中での受講者からの意見・要望も大いに参考にした。特に、メイン教材のレベルについては受講者と話し合って決めるようにしてきた。その結果、2014年度の前期と後期では授業内容が一部異なり、前期は中上級レベルの教材を後半に使用したのに対し、後期はコースを通じて初中級レベルの教材のみを使用することになった。受講者のニーズや日本語力によって柔軟性を持たせることも重要だと考えての判断だ。

聴解の授業では当然「聞く」力を伸ばすことが目標となるわけだが、「聞く」ためには語彙や文法がわかっていることが前提となる。そのため、必要に応じて新しい語彙・文法を覚えることも求められる。また、「話す」など他の技能と完全に切り離すことはできない。聞き取れるようになった表現を使ってみる、つまり「話す」ことで会話力の向上にも表現の定着にもつながるだろう。週1回90分という限られた時間の中ではあるが、語彙・文法の導入や話す練習にも一定の時間を割いてきた。同時に、聞く練習を十分に確保するために教室外で何ができるのかも重視してきたつもりだ。だが、これまでのやり方で十分であっただろうか、よりよい授業にするためには何か違ったアプローチがあるのではないだろうか、と日々頭を悩ませている。

本稿では、「聴解演習C」の授業実践について報告し、中級レベルの学習者にとって聴解授業はどうあるべきかを考えるきっかけにしたい。

2. 授業計画

2.1 受講者の特徴

「聴解演習C」は中級レベルの学生を対象としたクラスである。一口に中級レベルと言っても、これまでの学習時間や学習環境の違いによって実際には受講者の日本語力にかなりの差がある¹。よって、日常的なことであれば問題なく聞き取れるレベルから教師が話すコントロールされた指示の聞き取りが困難なレベルまでの受講者が同じクラスで学習することになる。また、「集中コース」と「一般コース」の共通開講のため受講者数が多くなる傾向があり、日本語力のばらつきが大きい原因の一つとなっている²。一般コースとして受講できる最上レベルがCクラスという事情から上級レベルの学生が受講する例もある。ただし、一般コースの学生については専門の研究を優先させるために出席数が足りず修了できないケースも少なくないことから、授業のレベルは集中コースの学生を対象に設定するようにしている³。2014年度については、前期は集中コースの学生の日本語力が高めであったため、コース後半はレベルを少し上げた授業内容にした。後期は通常のレベル設定で実施した。

2.2 受講者へのアンケート調査

受講者のニーズ分析をするため、2014年度後期の初回授業で以下のようなアンケート用紙を配布し、受講者にはその場で回答を書いてもらった。

参考資料1. アンケート用紙

聴解演習C アンケート

- 1) 日本語学習歴： _____ 年 (_____ 時間)
- 2) 今までどこで日本語を勉強しましたか。(国、学校名)

- 3) 聴解教材は何を使いましたか。

- 4) 日本語の聞き取りはむずかしいと思いますか。(はい ・ いいえ)
「はい」の人 → 何がむずかしいですか。
(話すスピードがはやい ・ ことばがむずかしい ・ その他： _____)
- 5) 何のために日本語が必要ですか。
例：研究室の先生と日本語で話す／日本語で論文を書く

- 6) どのレベルまで日本語を上達させたいですか。

- 7) 何かこのクラスについてリクエストがあったら書いてください。

回答を見ると、日本語を学習する目的は「専門の授業が聞いて理解できる」「日常生活やアルバイト先でのコミュニケーションが潤滑にいく」「日本語で論文が書ける」ことを目指すものがほとんどを占めていた。また、「聴解演習C」のクラスに対する要望としては、「聴解力が伸びるように」といった漠然としたものが多かったが、「日本の文化に関する文章（モノログ）を聞きたい」とするものもあった。要望についてももう少し具体的な回答を得るため、授業内でさらに口頭にて確認したところ、会話の聞き取りに加えて、社会問題からポップカルチャーまで幅広いトピックについて聞きたいとのことだった。こうした受講者の要望は教材を選定する上で参考にした。

2.3 使用教材の選定

教材の選定にあたっては、前担当者が使用していた『聞いて覚える話し方 日本語生中継・初中級編2』を検討するところから始めた。この教材は、トピック（「出会い」「趣味」など）が身近で話しことば特有の縮約形やくださった表現を多く含み、日常での実際の場面で役に立つと判断した。それぞれのトピックに合わせた機能（「出会い」というトピックで「名のある」「人を紹介する」など）が学べるように構成されている点も決め手となり、メイン教材として使用することにした。レベルとしては初中級であり、ほとんどの受講者に適応する。成績上位グループの受講者には同シリーズの「中～上級編」も十分に使用できるが、クラス全体での使用となると慎重に考えなければならない。集中コースの学生から要望があった場合に限り、学期後半から中上級レベルに教材を切り替えることにしている。

『日本語生中継』ではダイアログを聞くタスクが中心になるので、説明や解説スタイルのモノログを聞くための教材も選んだ。2014年度前期は『毎日の聞きとり plus 40上巻』（中上級レベル）を、後期は『中級日本語音声教材 新・毎日の聞きとり50日下』（中級レベル）を使用した。どちらも幅広い分野からトピックが選ばれているため、内容を楽しみながら語彙を増やすことができる。2回の授業でメイン教材を1課分進めていき、時間に余裕があるときに『毎日の聞きとり』シリーズを使っている。

なお、一部の学生からJLPT対策をしてほしいとの声があったが、日本語力の差があるクラスでは実施しにくいことから、基本的に授業内でJLPT対策はしていない⁴。2014年度については、前期の初回授業で『日本語能力試験』対策 日本語総まとめN2聴解』を一部使用するにとどめた。これは、受講者の聴解力を客観的に測り、授業内容のレベル設定をする上で参考にしたもので、学期途中や学期終了時での使用はなかった。

3. 授業内容

先に述べたように、学期ごとに受講者のレベルやニーズは違う。そのため、毎回同じ授業内容を実施してはいるが、メイン教材である『日本語生中継』シリーズを2回の授業で1課分進め、時間の余裕があるときに『毎日の聞きとり』シリーズから学生の興味があるトピックを選んで聞くという基本的なスケジュールは変わっていない。予習の一環として宿題を課し、学期中に何度か小テストを実施することもパターンとして定着してきた。ここでは、2014年度前期および後期で実施した授業内容の概要を述べる。

3.1 2014年度前期

初回授業で受講者の聴解力を測ると、通常より全体的にレベルが高いことが判明した。学習意欲が非常に高く、「できるだけ多くのものを」「少し難しいものを」聞きたいという要望もあった。集中コースの受講者5名のうち、3名がコース修了後は上級クラス（Dクラス）へ進む予定であることを考慮し、全15コマのうち最後の5コマについてはメイン教材として『聞いて覚える話し方 日本語生中継・中～上級編』を使用することにし、次のような予定を立てた。

表1. 授業内容（2014年度前期）

回	メイン教材（『日本語生中継』）	宿題の提出	小テスト
1	初中級編 2	1 課 出会い	
2			
3		2 課 ホテルで	2 課 ホテルで
4			
5		4 課 機械のトラブル	4 課 機械のトラブル
6			1 回目
7		7 課 健康のために	7 課 健康のために
8			
9		9 課 趣味	9 課 趣味
10			
11	中～上級編	2 課 一緒に行ってみない？	2 回目
12			
13		4 課 渋滞してるらしいですよ	
14			
15			3 回目

取り上げる課（場面）は毎回決まっているわけではないが、受講者にとって身近なものを選ぶようにしている。また、中～上級編へ移行する際、受講者がレベルアップに適應できるよう、最初に学習する課は慎重に選んだ。2課「一緒に行ってみない？」は、すぐ前に学習する初中級編9課「趣味」と共通の機能表現（「誘う」「誘いに受ける／断る」）が扱われていることから、学習のつながりを持たせやすかった。そのため、順調に上のレベルに移行できたように思える。

受講者の予習・復習がしっかりできていたこともあり、授業は問題なく予定通り進んでいった。時間の余裕があるときに使用する『毎日の聞きとり plus 40上巻』（中上級レベル）についても2コマに一度定期的に使用する時間が取れた。宿題の提出状況、小テストに向けた復習の実施状況も概ねよく、受講者のレベルアップにつながったという実感があった。

宿題および小テストについては後述する。

3.2 2014年度後期

前期とは対照的に、集中コースの受講者の日本語力が通常程度であると判断したため、メイン教材は『聞いて覚える話し方 日本語生中継・初中級編2』のみの使用とした。また、小テス

トに関して、「テスト範囲が広いと大変だから何とかしてほしい」「他の科目の試験や宿題の提出、発表などと重なると困る」といった過度の不安を訴える受講者がいたので対策を講じる必要があった。その結果、小テストは課ごとの実施へと変更し、以下のスケジュールで授業を進めていくことにした。

表 2. 授業内容 (2014年度後期)

回	メイン教材 (『日本語生中継』)	宿題の提出	小テスト	
1	初中級編 2	1 課 出会い		
2				
3		3 課 うわさ	3 課 うわさ	
4				1 課 出会い
5		4 課 機械のトラブル	4 課 機械のトラブル	
6				3 課 うわさ
7		5 課 失敗	5 課 失敗	
8				4 課 機械のトラブル
9		7 課 健康のために	7 課 健康のために	
10				5 課 失敗
11		8 課 駅で	8 課 駅で	
12				7 課 健康のために
13		10 課 抱負	10 課 抱負	
14				8 課 駅で

レベル設定および小テストの実施方法に無理がなかったためか授業の進行に大きな問題は生じなかったが、一部の受講者から挙手による質問・発言が頻繁にあり、時間内に予定していた内容が終えられないことが続いた。他の受講者への影響を考え、できるだけ授業後に対応するなど努めたものの、メイン教材 1 課を 2 コマ分の時間すべてを使ってやっと終える状態で『毎日の聞きとり』シリーズに時間をあてることがほとんどできなかったのが残念だった。小テストは課ごとの実施に変更したことで準備がしやすかったようで、結果はまずまずだった。受講者の状況に合わせ、じっくり進めていった成果だと前向きにとらえたい。

3.3 予習としての宿題

2007年度後期から一貫して「予習としての宿題」を課してきた。あらかじめ次のようなタスクシートを配布しておき、受講者は各自 CD を聞いて問題に取り組む。その課を学習する 1 回目の授業の始めに回収して添削し、次の授業でフィードバックをしながら返却する。予習によって授業の進行が潤滑にいくだけでなく、受講者の聴解力を把握するのにも役立っている。授業の開始とともに宿題を回収するのは、教室に来てから慌ててクラスメートのものを書き写したり、授業中に CD を聞きながら答えを書いたりするのを防止するためである。

参考資料2. 宿題のタスクシート (例)

聴解演習C 宿題

名前: _____

第5課 失敗

*スキット1を聞いて次の問題に答えてください。

1. ディクテーション

- A: 水野さん、()、どうでしたか。
B: ええ、それがね、ひどい失敗しちゃったの。
A: え? どうしたんですか。
B: 課長に資料のコピーを頼まれてたんだけど、()、
コピーしちゃったのよ。
A: ええー、大丈夫でした?
B: ()。
課長も私も、()に言われるまで気がつかなかったのよ。
A: うわー。
B: もう()。どうしてあんな失敗しちゃったんだろう。
A: 課長、だいが怒ってるんですか。
B: うん。今日の会議のために、がんばってたからね。
A: そうですよ。毎日()よね。
B: ()で、この企画だめになっちゃうかも。
A: でも、まだ決まったわけじゃないだし、()くださいよ。
B: うん、ありがと。

2. 質問

1) 誰と誰が、どこで話していますか。

2) 誰がどんな失敗をしたのですか。

3.4 小テストの実施

評価の一環として小テストを行っている。2014年度前期まではコース中に3～4回実施し、1回のテスト範囲はメイン教材2～3課分で30分以内に終わるものを用意してきた。主にディクテーションと会話の内容を問うものから構成される出題形式は一定であったが、学期ごとに問題の内容は変えるようにした。先に述べたように、2014年度後期は小テストの実施について見直し、回数を増やして1課ごとに行う方法に変更した。テスト時間は15分を想定して作成したが、実際には解答を書くのに時間がかかる受講者がいたため20分以上かけることになってしまった。

問題はすべて教室で聞いたものから出題し、授業中にぼんやりしていない限り解答できるものを作成した。受講者の実力ではなく授業の理解度を測るためのテストなので、日本語力の低い受講者であっても復習をすれば点数が取れる問題構成になっている。

3.5 課ごとの学習の流れ

ここでは、メイン教材である『聞いて覚える話し方 日本語生中継・初中級編2』を使った授業について、教室内外での「学習の流れ」という観点から実際の活動を図1にまとめ、以下で詳述していく。

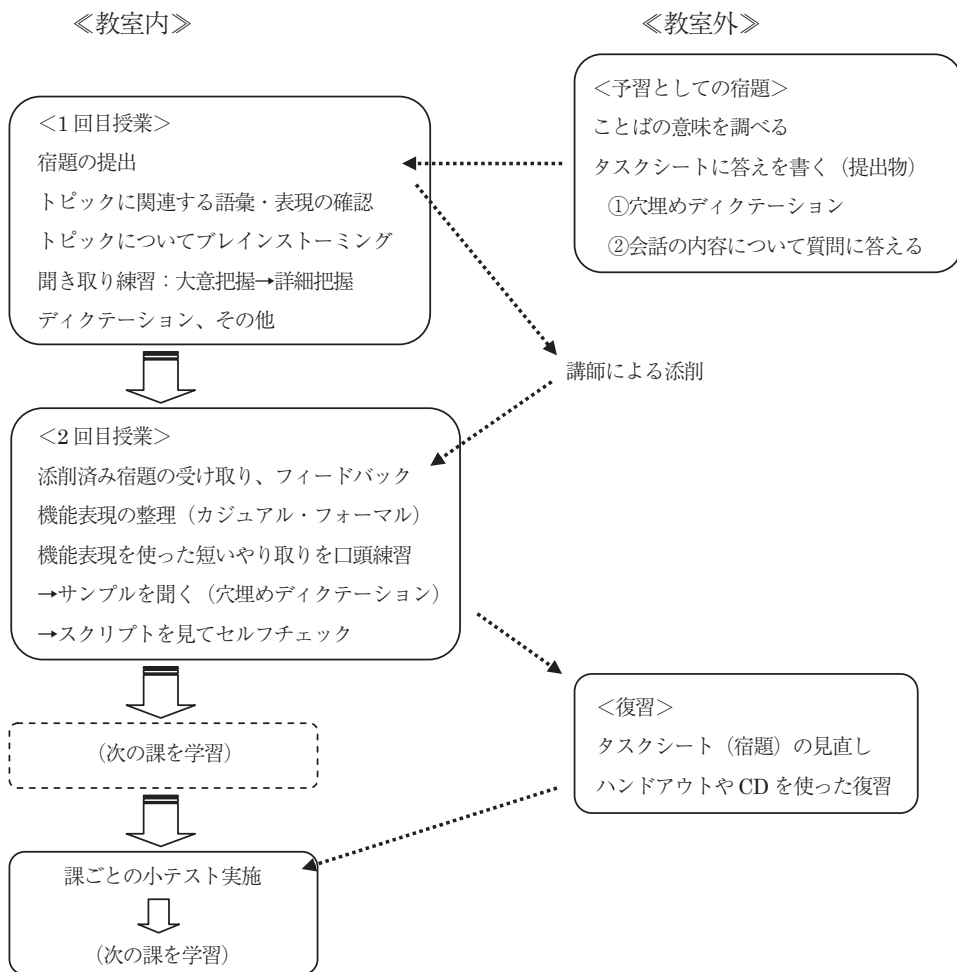


図1. 課ごとの学習の流れ

3.5.1 準備：予習としての宿題

特に日本語力の低い受講者にとって予習は重要だと考える。聴解本文に出てくる語彙の意味をおさえておくことや、授業で行う練習の一部を前もって学習しておくことで、気持ちにも余裕が

生まれ、落ち着いて授業に参加できる。メイン教材は受講者全員に貸し出しを行っており、いつでも自分のペースで音声教材を使った聴解練習ができるようになっている。熱心な受講者はCDからスマートフォンなどに音声を取り込み、ちょっとした時間を見つけては聞いている。

自分のペースで予習するのは難しいという受講者も多いので、「参考資料1. 宿題のタスクシート（例）」のような宿題を課している。この宿題に取り組むまえに、テキストにまとめられたキーワードの意味を調べるように推奨している。受講者のレベルにもよるが、会話特有の縮約形や文末の省略が多いこと、自然なスピードの会話が速く感じられることなどから、どうしても聞きとれない箇所がある。それでも、回数を重ねることで聞き慣れてくるようで、「宿題が難しくできない」といった苦情はなかった。

3.5.2 課の前半：1回目授業

授業での課の学習は、聞き取りの準備としてトピックに関する語彙や表現を確認するところから始める。トピックについてのブレインストーミングがこれに続く。あくまでも聞き取りのためのウォーミングアップという位置づけであり、時間をかけすぎるのは望ましくない。目安として語彙・表現の確認とブレインストーミングを合わせて15分、活発な発言があっても20分を超えないよう時間をチェックしながら進めている。

次にCDを使った聞き取り練習に入る。各課4つの会話があるのだが、最初の会話は宿題としてすでに聞いたものを授業で扱うことになる。自習の段階ではよく聞き取れなかった箇所をこの段階では明確に理解できるようにするねらいがある。1つの会話についてCDを3回聞く。1回目を聞いたあと、会話の内容が大まかに聞き取れているかどうか確認する。話している人物の関係、場面（場所、時間帯など）、話の結論、といった基本的なことを口頭で質問する。人物の関係は話している文体から推測するように促している。また、この程度の質問ではやや物足りないと感じる受講者への対応として、他に聞き取れたことを何でもいいから言ってもらうようにしている。2回目は途中で止めながら、細かい内容について聞き取っていく。3回目は確認のために通しで聞く。同じパターンで4つの会話の聞き取り練習を進めていく。

続いて、縮約形など口語的な表現や機能表現を含む文を正確に聞き取れているかの確認としてディクテーションを行う。テキストに練習問題として載っているものを使用し、5つの文で練習する。CDを2回聞いてから板書を見てセルフチェックさせ、助詞の省略や縮約形、受身や使役といった文法、敬語などの復習も必要に応じて行う。最後は「ポイントリスニング」という単文レベルの聞き取り練習で、イントネーションの違いや表現の小さな違いによって意味が異なるものを聞き分けることを目的とする。

3.5.3 課の後半：2回目授業

授業の始めに宿題を返却し、簡単にフィードバックを行う。その後、課の後半の学習に入る。課の前半は「トピック」に重点を置くのに対し、後半はトピックの中でよく使用される「機能表現」を中心に学習を進める。1回目授業での会話の聞き取り練習で機能表現はすでに使われているが、2回目授業では口頭練習を取り入れ定着を目標とする。

まず、テキストに「カジュアル」「フォーマル」に分けて整理された機能表現を音読してみる。イントネーションや発音に注意し、相手に伝わるように声を出して練習をする。次に、状況設定

をして機能表現を使った短いやり取りを考える発展練習へと進む。状況が思いつかない場合はテキストに練習問題として設定されている状態で練習する。数分ペア練習をする時間を取り、指名されたペアが発表する。次は穴埋めディクテーションのタスクである。タスクシートを配布し、受講者はCDを聞いて答えを書き入れていく。聞くのはテキストにある練習問題のやり取りのサンプルだ。自分たちで考えたものと比較することで何が足りなかったかを考える機会になる。課ごとに機能表現は2つか3つあり、それぞれ「機能表現の音読」→「機能表現を使った会話練習（ペア）」→「サンプル会話の穴埋めディクテーション」の流れに沿って進めていく。サンプル会話は機能表現ごとに4つあり、最後にスクリプトを見てディクテーションのセルフチェックをするのだが、スクリプトは課の前半（1回目授業）に聞く部分を含めこの段階まで一切見ないようにしている。

これでメイン教材を使った学習は一通り終了する。時間の余裕があれば、『毎日の聞きとり』シリーズなど他の教材で学習する。

3.5.4 定着：復習・小テスト

「表2. 授業内容（2014年度後期）」を見るとわかるように、小テストの実施日は宿題の提出日と重ならないように予定が組んである。授業での学習から小テスト実施まで少し間が空けてあり、受講者は各自のペースで授業を振り返ることができる。宿題のタスクシートを見直し、ハンドアウトやCDを使って復習し、小テストの準備をしておくよう指導している。小テストの結果が成績に反映することもあるが、準備は概ねしっかりしているようで、点数としてはクラス平均で80%以上のことが多かった。当然のことながら欠席した次の小テストでは点数を落とすことがあり、授業への出席があってこそその復習だと言える。

4. 中級聴解授業での指導について

2007年度後期に初めて中級聴解授業を担当して以来、反省と試みを繰り返して3章で述べたような方法で指導するに至った。その中で工夫してきた点、今後に向けて改善すべき課題を以下にまとめたい。

4.1 工夫してきた点

最も気を配ったのは、レベルがまちまちである受講者が同じクラスで学習しなければならない状況でどうすれば皆がそれぞれの目標に合わせてレベルアップできるかということだ。この点に関してこれまでに次のような方法を試みた。

- 1) 使用する教材のレベルに変化を持たせる
- 2) 成績上位者向けの特別宿題を用意する（通常宿題と特別宿題の2種類を用意する）
- 3) 聞き取り練習の際、基本的なタスクと応用的なタスクを設定する

1) について、1回の授業の中に難易度の高い教材（JLPT対策など）を使用する時間を取るようにした時期もあったが、メイン教材である『日本語生中継』の学習にあてる時間が十分に取れなくなるなどの問題があった。学期の始めは全員が十分対応できるレベルであるべきとの反省からこのやり方は中止した。現在は、先に述べたように集中コースの学生のレベルによって学期

の後半に少し上のレベルの教材へ移行する方法でレベルに変化を持たせている。

2) のように宿題を2種類用意するに至った経緯を説明すると、一般コースの受講者に JLPT N1 合格者が複数いたため、クラスのレベルを少し上げざるを得なかったことがある。集中コースの学生の同意を得てメイン教材は上のレベルのものを途中から使用したが、宿題も簡単すぎては意味がないので成績上位者には別のものを配布することにした。通常に比べて、①ディクテーションで書き取る箇所が長い、②内容に関する質問の数が多く、といった違いを持たせた。ただ、通常宿題をやってほしい受講者まで特別宿題を希望するという問題が生じたこともある。2014年度については、特別宿題が必要な受講者がいなかったため、全員に通常宿題を配布した。

3) のタスク設定だが、授業内で会話の聞き取り練習をする際、①会話をしている人物の関係、②何について話しているか、③会話の場面（場所、時間帯など）、④話の結論、を聞き取るのを基本的なタスクとして設定している。これは全員が取り組むタスクだが、一度に全部は難しいという受講者については、まずは①と②だけを集中して聞くように指導している。また、応用的なタスクとして、余裕がある受講者にはメモを取りながら CD を聞かせ、聞き取れた情報を発表してもらったり、内容に関する教師からの質問に答えてもらったりしている。受講者は自分のレベルやコンディション（予習状況やその日の体調など）に合わせて聞き取り練習に取り組めるため、ストレスを感じることはない。単純であって有効な方法だといえる。

4.2 今後に向けての課題

レベルも学習目的も多様な受講者に授業を行うための工夫はこれからも続けていかなければならないだろう。それに加え、使用教材の見直しもしたい。学習意欲を向上させるには魅力ある教材が必要だ。5年、10年と年数が経過するにともない、教材の内容が実情にそぐわなくなっていくこともある。例をあげると、「電話をかけてホテルの予約をする」「ファックス送信をする」といった場面は、10年前はまだ一般的だったかもしれないが、現在では受講者の世代ではめずらしくなっている。

もう一つの問題として、「受講者がコースを修了して一体どれだけ聴解力を高めることができたか」という素朴な疑問が頭をかすめる。限られた授業時間内のできることに限界があるので、教室外での受講者の状況に合わせた自習方法の提案ができるよう考えていきたい。具体的には、①授業内では取り上げない課についてもワークシートを配布し自習を推奨する、② JLPT 対策を希望する受講者について何らかのバックアップをする、などがある。②については、学習計画を立てさせて定期的に状況確認をするのもいいだろう。教材の紹介や貸し出しもできればと思う。

5. おわりに

振り返ってみると、試行錯誤してきたのは潤滑なクラス運営のためだったにすぎないように思える。「受講者は授業を楽しんでいるか」「授業についてこられない受講者はいないか」「レベル的にやさしすぎて退屈に感じていないか」「授業に不満を持った受講者はいないか」といったことに気を取られ、その対処に必死だった。確かに担当を重ねるうちに、どのようなクラス構成であっても表面的な対応はできるようになった。では、それで受講者の聴解力がどれだけ伸ばせたかと問われると、教師としての自信が揺らぐ。よい聴解授業とはどんな授業だろうか。やはり、

受講者が着実に聴解力を伸ばしていく授業だろう。そのために何を改善すべきか課題も少し見えてきたが、もう少し考える必要がありそうだ。

注

- 1 2014年度前期コース開始時に JLPT N2 レベルの模擬試験を実施したところ、正答率は45%～78%（平均64.91%）だった。
- 2 岐阜大学留学生センターの日本語研修コースには日本語を集中的に学ぶ「集中コース」と専門の研究と並行して日本語が学べる「一般コース」がある。中級レベルであるCクラスについては、集中コースは週10コマ以上の履修が必修なのに対して、一般コースでは週1～5コマを集中コースとの共通開講科目から選んで受講する。
- 3 受講者数は2011年度前期から2014年度後期においては10名から15名だった。それ以前を含めると、20名を上回ることもあった。一般コースの受講者のうち、修了できなかった人数は2014年度前期が8名中7名、2014年度後期が8名中2名であった。集中コースは2014年度前期・後期とも全員が修了した。
- 4 「聴解演習C」の受講者には JLPT N2 合格者もめずらしくない。その場合、対策として N1 レベルを希望することになる。一方、受講者の中には N2 レベルでも難しすぎると感じる場合もあり、一斉に JLPT 対策をすることはできない。基本的に JLPT 対策は自習によって進めればよいと考える。

使用教材

- ボイクマン総子・宮谷敦美・小室リー郁子（2006）『聞いて覚える話し方 日本語生中継・初中級編2』くろしお出版
- 梶本総子・宮谷敦美（2004）『聞いて覚える話し方 日本語生中継・中～上級編』くろしお出版
- 宮城幸枝・太田淑子・柴田正子・牧野恵子・三井昭子（2011）『中級日本語音声教材 新・毎日の聞きとり50日下』凡人社
- 宮城幸枝・三井昭子・牧野恵子・柴田正子・太田淑子（2003）『毎日の聞きとり plus 40上巻』凡人社
- 佐々木仁子・松本紀子（2011）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N2 聴解』アスク出版

